

## 弓の名人

むかしは綿わたを作るとき、綿弓という弓で打ったので、綿を打つ仕事をする人のことを弓うちといいました。

むかし、あるところに、綿屋がありました。そこにひとり息子がいました。

息子はばくちがすきで、持っているお金をみんなばくちに使ってしまいます。父親はおこつて、

「おまえのようにはくちばっかりしてはだめだ。わしももう年だから、おまえがしっかりしないといけない。家を出て商売でもしろ」といって、家を追いだしました。

息子は、

（それなら、ほうろくでも売ろうか）と思って、たくさんほうろくをかついで歩いてきました。

つえをついて、ふうふういいながら山道を登っていくと、どこからかゴソゴソゴソの音が聞こえてきました。

（何かしらん）と思ってひよいと見ると、男が何人か、しげみのかげでばくちをしています。息子は、そうつとのぞいているうちに、

（あつ、半をはってるけど、丁じゃないとだめだ）

（ほらみる、やっぱり丁だ）と、むちゅうになつてしまいました。そして、力を入れすぎて、ほうろくをささえていたつえがひよいとはずれてしまいました。とたんに、ほうろくはバタバタバターツとくずれて、みなわれてしまいました。ものすごい音がして、ばくちをしていた男たちはみなびっくりしました。そして、

「化け物ばけものだあ」と、にげていってしまいました。息子は、

「えらいことをした。ほうろくをみんなわつてしまった」といって、ひよいと見ると、男たちがばくちをしていた所に、お金がたくさんおいてありました。息子は、

「ああ、うまいことをした」といって、そのお金をぜんぶ拾い集めて、また歩いていきました。

そのうち日がくれてきました。すると古いお寺があったので、泊とめてもらおうと思って声をかけました。けれども、だれもいません。しかたがないので、息子は、「おじやまし

す」といって、中に入りました。そして、天井裏へ上がっていきました。

真夜中、息子が寝ていると、下でゴソゴソゴソ声がありました。

（今ごろ、なんだろう）と思ってそっとのぞくと、男がたくさん集まってばくちをしていました。息子は、

（さっきのやつらがいるかも知れない。見つかったら大ごとだ）と思って、音を立てないようにしてこっそり見ていました。けれども、もともとばくちがすきなので、ついむちゅうになってしまいました。思わず力が入って、そばにおいてあった壺やら皿やらを、男たちの上に、ドシャーッと落としてしまいました。さあ、みんなびっくりして、たかさんのお金を置いたままにげて行ってしまいました。

息子は天井裏から下りてきて、お金を拾い集めました。

「なんだか、運がついてるなあ」

あくる朝、息子は、

（これだけお金を持っていたら、なんでも出来るぞ。なにかおもしろいことがないかなあ）  
と思いつながら歩いていきました。すると、むこうから、

「紀州さまのお通り」と、先払いをして、大名行列がやって来ました。息子はあわてて行列の前を横切つて道をわたつてしまいました。すると侍が、

「無礼者。お殿さまの御前を横切るとは、何事だ。手打ちにいたす」といって、息子をしばりあげてしまいました。

お殿さまは、息子に、

「おまえは何者か」とききました。

「はい。綿屋の弓打ちでございます」と、息子は答えました。すると、お殿さまは、

「なに、弓撃ち。それはよかった。ちようど弓の名人をさがしていたところだ。じつは吉野川の中州に化け物屋敷があつて、毎晩化け物が出る。これまでだれが行つても退治することができず、みな食われてしまった。おまえ、その化け物を退治したら、わしの姫の婿にしてやるぞ。いやだというなら手打ちにする」といいました。息子は弓で綿は打てるけれど、矢を撃つたことなんかありません。けれども、手打ちにされるのまかなわないので、こまったなあと思いつながらも、化け物屋敷に行くことにしました。

ところで、お姫さまは、

(あんなうすよこれた旅の人と結婚けっこんするの、いやだわ。もし化け物を退治して帰ってきたらどうしよう)と思いました。そこで、お弁当べんとうに毒どくを入れて息子に持たせました。息子は、なにも知らずによるこんでお弁当をもらって、弓と二十本の矢を持たされて、化け物屋敷に出かけました。

息子は、

(もうどうなつてもしかたがない。お殿さまの前を横切ったときに首を切られたと思ったらいんだ。化け物に食われたつてしかたがない)と思つて、家来けらいについて行きました。

ところが、化け物屋敷に着いて、家来がみな帰つてしまつてひとりきりになると、こわくなつてきました。

「こりゃいけない。早くどこかにかくれなくては」

息子は、急いで二階に上がりました。けれども、あわてていたので、お弁当を下にわすれてきてしまいました。

(ああ、おいしいことをした)と思いましたが、取りにいくのもこわいので、(もう食べなくてもいいさ)と、そのまま横になつて待つことにしました。

夜中になると、黒い大きいかわうその化け物が出てきました。息子が二階から見ていると、かわうそは、お弁当の包みを見つけてガサガサ食べはじめました。そして、毒に当たつてころつと死んでしまいました。

息子は、かわうそが動かないので、

「うまくいったぞ」といつておりてきました。そして、持ってきた二十本の矢をかわうその目に入れ、鼻に入れ、口に入れ、わきに入れ、ぜんぶおしこんでしまいました。

朝になると、家来たちが、

「あいつ、化け物に食われてしまったにちがいない」といいながらやつてきました。ところが、男は部屋のまんなかになつて、いねむりをしています。そばに大きなかわうそが死んでいて、二十本の矢がみな急所に立っていました。

「これはすばらしい。弓の名人だ」と、みんなはびっくりして、息子をお城しろにつれて帰りました。

お殿さまもよろこびましたが、お姫さまも、

「あのときはたよりなく思つたけれど、弓の名人だし」と、息子のことがすきになりました。

た。

息子はお姫さまと結婚して、なかよく幸せにくらしたということです。  
おしまい。

『奈良県吉野郡昔話集』 國學院大學説話研究会  
再話…村上郁

